

【授業者からの補足】

・今回は、学習者の学習意欲を喚起するために、QFT (Question Formulation Technic) の手法を用いて、問いづくりの授業を行った。「問いの焦点」(注：QFT における、問いづくりのきっかけとなるもの)として、人工光合成と植物の光合成の比較を利用し、学習者の意見共有に MetaMoji を用いたが、それらが適切だったかどうかなど、ご意見をいただきたい。

【ブレイクアウトルームでの協議 (一部)】

・問いづくりによって、教科書以上の内容について、学習者の関心が引き出され、科目横断的な内容に思考が広がっていた。MetaMoji の使用についても、意見共有において有効だった。

・問いづくりは意欲喚起だけでなく思考の活性化にも有効だが、難しい。キーワードを挙げるなど、工夫が必要だ。MetaMoji の使用は、多様な学習者に対応して、授業展開をテンポ良く進め、教え合いなどの協働的学習を促進に有効だったのではないか。

【全体協議 (一部)】

・問いづくりは重要だが、どのようなステップが必要か？

→問いを考えるためには、きっかけとなる知識が必要だ。そこで今回は、人工光合成と植物の光合成との比較を「問いの焦点」とした。このような「問いの焦点」をいかに作るかは、問いづくりの授業において非常に重要だ。

【助言】

・問いづくりは、拡散的思考を促しても、それを収束させることに確かに難しさがあるが、まずは学習者が自分の中から問いを生み出す経験を重ねることに意味がある。それを表現することで、自分たちの問いが自分たちの学びを支えているという、自己肯定感をつけることが期待できる。その中で、みんなで問いを出し合うことによって、影響を受けながら、学習が協働的に営まれていく。

・授業を組み立てる上で、学ぶことと、学習者の生きるの実感をどうつなげるか、そこに課題がある。その点で、今回の「問いの焦点」は光合成の比較と、企業の研究が結びつく、学習者の学びを刺激するにふさわしいものだった。また、ICT の活用も個人作業が集団での学びに集積していくために効果的だった。

・今回の授業は、オーソドックスな QFT のプロセスとはやや異なるが、時間の関係もあり、問いを立てることにフォーカスしたものだった。学習者の問いをベースにした、今後の授業展開にも期待したい。

【授業者より】

・学習者が考え、選択した問いには、授業者の想定を超えるものもあった。本時の目標は達成できたと思われるが、本時の学習者の問いを生かす授業展開を考えたい。